



授業中に学ばなかったことー漱石と鷗外

明治以降の文豪といえ、多くの人が夏目漱石と森鷗外を挙げるわけですが、しかしボブ・ディランのノーベル文学賞を認める人と認めない人がいるように、文学には人それぞれ好みがあって、150年祭とはいいながら、私は、どうも漱石という人とは肌合いが悪いのです。

これは、出会いも悪かったのかも知れません。漱石を初めて読んだのは、高校の国語の授業でした。国語の先生には申し訳ない言い方ですが、授業中に会う文学作品は、それ自体何か味気ないところがあって。

初めて読んだ作品は、かの有名な『坊っちゃん』でした。しかし、この作品がもつ人間類型に面白味は感じたものの、ここに登場する人物群は、坊っちゃんを含めてどれも私の好みとするところではない嫌味な人間たちで、まあそれはそれとして、『坊っちゃん』は、通俗小説のような気がして、この作品のどこがそれほどいいのだろうと不思議に思ったほどでした。

でも、文豪漱石に一作だけで評価を下すのは罰当たりと、しばらく経って『虞美人草』を読んでみました。最後まで読み通しはしたものの、これは、全く辛気臭い話で。

でも、二作だけで評価を下すのも罰当たりと、しばらく経って『こゝろ』を読んでみました。

「私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。其時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達から是非来いという端書を受取つたので、私は多少の金を工面して、出掛ける事にした」。

こう書き出して、鎌倉の海が描かれるのですが、その冒頭からしていけないのです。全く鎌倉の海になっていないのです。由比ガ浜が出てきても、それは、名ばかりのことで、都心からそう遠くない保養地なら、千葉の海でもどこでもいい。鷗外の『妄想』の冒頭の「目前には広々と海が横はつてゐる。その海から打ち上げられた砂が、小山のように盛り上がり、自然の堤防を形づくつてゐる」と書き出される上総夷隅川辺りの海の描写と比べてみれば、それは、一目瞭然で、まるで風景というものが彷彿としてこない。あまり落ち着きのある文章ともいえず、そう巧みとも思えない。

千円札の肖像になつたこともある漱石をつかまえて、福井某などが、『こゝろ』の文章が落ち着きがなく巧みでないなどと、よくもまあ血迷つたことをいうものかと、きっと揶揄嘲笑を受けることでしょう。

なるほど、『草枕』などは、確かに濃密な言葉の芸術世界が繰り広げられていることは解かりますが、漱石の本性は、むしろ小説の人というよりも、ふと評論の人であつたのかも

知れないと思ったりもして。

加えていえば、留学してノイローゼになってしきりに帰国したが、真偽のほどは知りませんが、土井晩翠が「夏目狂セリ」と電報を打ったとか打たなかったとか。しかし、その揺れる弱さも含めて日本人好みで漱石ファンは圧倒的に多いのですが、何れにしても私の中で漱石の印象は、そう芳^{かんぼ}しいものではないわけです。

それに引き替え鷗外は、孤高ではありますが、立派でした。公人としては陸軍軍医総監まで昇りつめ、そのかわらゲーテの『ファウスト』や原作以上の格調と誉れ高いアンデルセンの『即興詩人』の翻訳を残し、『舞姫』、『雁』、『かのやうに』と多くの作品を著わし、かの三島由紀夫が「物を貫ぬくレントゲンのな描写力」と絶賛した透明な文体をもって、恋愛から文明、貴顕淑女が集まる夜会から人間の生死^{しやうじ}までを見事に描き出して見せました。

もっとも、文芸評論家の石川淳にいわせれば、『渋江抽斎^{しぶえちゆうさい}』や『北條霞亭^{ほうちょうかてい}』といった本格歴史小説と比べれば、『雁』などは児戯^{じぎ}に類するものだそうですが、しかしこちらの方は、正直私には難しすぎて歯が立ちませんでした。

漱石がロンドンで沈鬱に明け暮れた間、鷗外は、ベルリンで雄々しく活躍しました。あの『舞姫』の主人公のような「検束^{けんそく}に慣れたる勉強力^な」をもって医療を調査し、日本人を無知無能と嘲笑した地質学者ナウマンとは新聞紙上で論争し、ドイツ女性には恋焦がれられと、今ではゲーテが『ファウスト』の中で描いたライプツィヒの地下食堂アウエルバッハには羽織袴の堂々たる鷗外の壁画が描かれています。

文学などは、自発的に学び取るものも多いわけで、授業中に学ばなかったことで生涯にわたり心に刻印されるものもあるものです。中学や高校の教室にはそんな厄介な生徒が混じっていることも、先生方も頭のどこかにおいておいて下されば、却って生徒たちの励みになりそうに思ったりもして。

さて、生徒の皆さんにはどう映るのでしょうか、何ととっても二人とも間違いなく大文豪ですもの、気が向いたら、春休みは終日^{ひねもす}漱石・鷗外を読んてみたら如何でしょう。

[>前のページへ戻る](#)